

復習シート 第一学年 国語



【登場人物の心情を読み取る問題】
次の問題を解きなさい。

【R2】復習シート
「ここまであらすじ」 岡村七郎は、とても仲の良かつた友人の沢田を、事故で亡くし、大きなショックを受けている。そして七郎が去年、沢田と参加し活躍したT中学との対抗マラソン大会を迎えた。しかし、気持ちが入らない状況であった。

その秋のマラソンは「名月マラソン」という名目で、十五夜の晩決行されることになつていた。○町の海岸からT町まで、海岸線五哩の往復というのである。

空は蒼々と澄み渡つていた。お伽噺のそれの如く、大きな月は未だ暮れきれぬ中から空中に白銀のように光つていた。

町民は熱狂した。花火はひつきりなしにあげられた。砂浜は見物の人、応援の人々で麻のように乱れた。海岸の所々には目標の為の篝火が燃え始めた。——その夜米村と共に選手の重任を帯びた七郎が、何れ程衆目を集め、又味方の人々から期待されたかは、ここにしるすまであるまい。

やがて割れるような歓呼に送られて、選手達は徐ろにスタートを切つた！

余り長くもない町を出てしまふと、ただ遠くに祭のようなぞめきが、聞える許り。それもだんだんに消えてゆくと、もう月と海とそうして海辺の松とより他に見ているものはなかつた。水面に投げられた月光の反射が松林の奥まで光つていた。さざ波はパサパサと駆ける七郎の足音に韻律を合せていた。

「①何という美しい月だろう！」

七郎は駆りながら思わず呟いた。——自分の心とは全然離れて、ただ足だけが機械のように動いているのであつた。あとにも先にも人影は見えなかつたから、自分が勝つているだか、敗けているのだか解らなかつた。——今が今、あれ程多勢にさわがれて送り出された自分であるとは、どうしても考えられなかつた。それ程月は美しく静かに照つていた。

……今にも沢田の声が聞えるかのよう、波は小さく囁いていた。今夜のような良夜な

国語（読むこと）
ら、月の世界にもゆけそうに思えた。月とお話も出来そうに思われた。死ぬこと生きることは、別にそう大した区別のあるものとは思われなかつた。そうなると七郎は今迄沢田の死を悲しく思つていた事が、何だか無意味のように思われ出した。

「そう、沢田は今頃どんなに幸福に暮しているかわからない……」

もう悲しむまい。そうして沢田がいる時と同じように、愉快に楽しく送れないわけはない。何故なら沢田はすぐそこの月の窓から、自分に話しかけているのだもの……。

「沢田君、今日から又二人で旧のよう面白く遊ばうね。」

誰にいうともなくこう言つた、七郎の瞳は新しい希望にもえて來た。

「岡村君、君は思い違いをしているよ。君は僕が死んだと思つて悲しんでいるが、僕は決して死にはしないよ。そら、去年と同じように君と一緒に駆けているじゃないか。」というかのよう見えた。

七郎は思はず微笑んだ。

「沢田君、一緒に駆けよう。」と云つて、^②七郎は今度こそ本気になつて走り出した。

《牧野信一「月下のマラソン」より。学習上の配慮により旧仮名遣いを直している。》

（注）※五哩＝約八km。一マイルは約一・六km。

※篝火＝夜間、照明などのために燃やす火のこと。

※衆目＝多くの人が見ること。

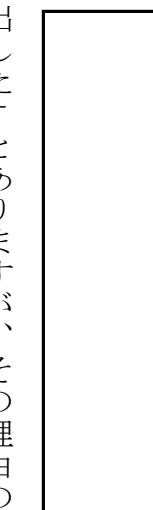
※歓呼＝喜んで大声をあげること。

※ぞめき＝浮かれてさわぐ様子のこと。

※良夜＝月の明るい夜のこと。特に、中秋の名月の夜のこと。

問1 線部①「何という美しい月だろう！」とあります。七郎が感動した月の様子を、たとえを使って詳しく説明している一文を探し、最初の五字を書き抜きなさい。

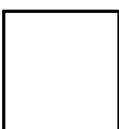
レベル7～9



問2 線部②「七郎は今度こそ本気になつて走り出した」とあります。その理由の説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

レベル8

- 1 七郎は友人の沢田が死んだと思つていたが、実際に目の前に現れた姿を見て近くにいることを実感でき、力が湧いたから。
- 2 七郎は去年死んだ沢田のことを月から思い出し、走っている時のさざ波が沢田の応援に聞こえて新しい希望がもてたから。
- 3 死んだ友人の沢田の声が美しい月の光とともに自分に降り注ぎ、月の世界でやつと再会でき、励まされたから。
- 4 七郎は死んだ沢田を美しい月によつて近くにいると感じ、その沢田と一緒に走ろうと言つてくれているように思えたから。



復習シート 第一学年 国語

【R2】復習シート 中学校2年 国語（読むこと）

組	
番号	
名前	

【登場人物の心情を読み取る問題】

- 1 次の問題を解きなさい。

模範解答

「ここまであらすじ」岡村七郎は、とても仲の良かつた友人の沢田を、事故で亡くし、大きなショックを受けていた。そして七郎が去年、沢田と参加し活躍したT中学との対抗マラソン大会を迎えた。しかし、気持ちが入らない状況であった。

その秋のマラソンは「名月マラソン」という名目で、十五夜の晩決行されることになつていて。○町の海岸からT町まで、海岸線五哩の往復というのである。

空は蒼々と澄み渡つていた。お伽噺のそれの如く、大きな月は未だ暮れきれぬ中から空中に白銀のように光つていた。

町民は熱狂した。花火はひつきりなしにあげられた。砂浜は見物の人、応援の人々で麻のようになつた。海岸の所々には目標の為の篝火が燃え始めた。——その夜米村と共に選手の重任を帯びた七郎が、何れ程衆目を集め、又味方の人々から期待されたかは、ここにしるすまでもあるまい。

やがて割れるような歓呼に送られて、選手達は徐ろにスタートを切つた！

余り長くもない町を出てしまふと、ただ遠くに祭のようなぞめきが、聞える許り。それもだんだんに消えてゆくと、もう月と海とそうして海辺の松とより他に見ているものはなかつた。水面に投げられた月光の反射が松林の奥まで光つていた。さざ波はパサパサと駆ける七郎の足音に韻律を合せていて。

「①何という美しい月だろう！」

七郎は駆りながら思わず呟いた。——自分の心とは全然離れて、ただ足だけが機械のように動いていたのであつた。あとにも先にも人影は見えなかつたから、自分が勝っているだか、敗けているのだか解らなかつた。——今が今、あれ程多勢にさわがれて送り出され



た自分であるとは、どうしても考えられなかつた。それ程月は美しく静かに照つていた。
……今にも沢田の声が聞えるかのよう、波は小さく囁いていた。今夜のような良夜なら、月の世界にもゆけそうに思えた。月とお話も出来そうに思われた。死ぬこと生きることは、別にそう大した区別のあるものとは思われなかつた。そうなると七郎は今迄沢田の死を悲しく思つていた事が、何だか無意味のように思われ出した。

「そう、沢田は今頃どんなに幸福に暮しているかわからない……」

もう悲しむまい。そうして沢田がいる時と同じように、愉快に楽しく送れないわけはない。何故なら沢田はすぐそこの月の窓から、自分に話しかけているのだもの……。

「沢田君、今日から又二人で旧のよう面白く遊ばうね。」

誰にいうともなくこう言つた、七郎の瞳は新しい希望にもえて來た。

「岡村君、君は思い違いをしているよ。君は僕が死んだと思つて悲しんでいるが、僕は決して死にはしないよ。そら、去年と同じように君と一緒に駆けているじゃないか。」というかのよう見えた。

七郎は思はず微笑んだ。

「沢田君、一緒に駆けよう。」と云つて、^②七郎は今度こそ本気になつて走り出した。

『牧野信一「月下のマラソン」より。学習上の配慮により旧仮名遣いを直している。』

(注)※五哩=約八km。一マイルは約一・六km。※篝火=夜間、照明などのために燃やす火のこと。

※衆目=多くの人が見ること。

※ぞめき=浮かれてさわぐ様子のこと。

※良夜=月の明るい夜のこと。特に、中秋の名月の夜のこと。

問1――線部①「何という美しい月だろう!」とあります、七郎が感動した月の様子を探す。傍線部の直前から探そうと考えてしまつと、たとえのない「水面に投げかけられた月光」と迷つてしまつます。気をつけましよう。

レベル7~9

お伽噺のそ

「たとえを使って」とあるので、たとえ(の如く、)のようを使うを探す。傍線部の直前から探そうと考えてしまつと、たとえのない「水面に投げかけられた月光」と迷つてしまつます。気をつけましよう。

問2――線部②「七郎は今度こそ本気になって走り出した」とあります、その理由についての説明として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

レベル8

1 七郎は友人の沢田が死んだと思っていたが、実際に目の前に現れた姿を見て近くにいることを実感でき力が湧いたから。

七郎が大きく変容した原因を見つける。「月とお話も出来そうに思われた。」「月の窓から、自分に話しかけているの……。」「波が」と再び囁いていた。波は声であるとは書いてない。「月」から声が聞こえてくるかのように、静寂な様子になっていること。「よう」が何を例えたかをつかもう。

うと言つてくれているように思えたから。